Ayuchi
あ ゆ ち

[No.94/2023.1]

「モカケーキ」 イミック新子さん作

公益財団法人　愛銀教育文化財団

王者の狩り 鷹狩

織田信長や徳川家康も愛した鷹狩。
空の王者である鷹を遣い行われる日本伝統の狩りは、
世界一美しいともいわれている。
そんな、今ではなかなか見ることのできない鷹狩とは
どんなものであったのだろうか。

「徳川十五代記畧 十代将軍家治公鷹狩之圖」歌川芳藤

鷹狩とは、どんな狩り?

鷹狩とは、鷹を捕らえるのではなく、訓練された鷹を放ち、鳥や小動物を捕らえる狩猟のことだ。鷹が獲物を追う本能を利用したこの狩りは古来より行われ、放鷹、鷹野とも呼ばれている。

ここでいう鷹とは猛禽類の総称であり、遣われる種類はオオタカ、ハイタカ、ハヤブサなど。狙う獲物は主に、キジやカモ、ウサギなどだ。狩りは、主役となる鷹、鷹やハヤブサを飼育し訓練する鷹匠、猟犬などがチームとなって行う。

流派や獲物により違いはあるが、鷹狩の基本的な流れは、次のとおりだ。

1. 鷹匠が鷹を拳に据えて(鷹狩用語で「とまらせる」の意)獲物を探す。見つけたら、できるだけそっと近づく。
2. 獲物に向かって鷹が飛び立とうとする時、加速をつけるために投げるように押し出す(鷹狩用語で羽合という)。
3. 獲物を捕らえたら、捕らえた場所まで鷹匠が走る。鷹は羽などをむしりながら、鷹匠が到着するのを待っている。ちなみに、羽をむしるのは食べる準備をするため。
4. 到着した鷹匠は、ご褒美の餌を与えて獲物を回収する。

鷹は誇り高き生き物

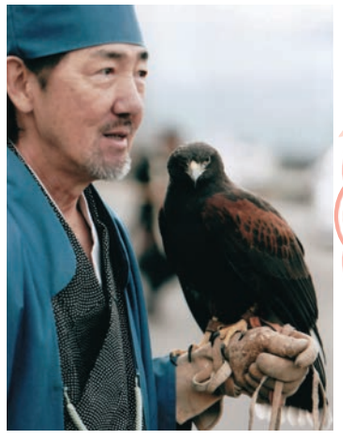
鷹は強そうに見えるが、その実態はとても神経質で、臆病。少しの物音で、驚いて逃げるほど。鷹本来の野性味が消えることはなく、人に慣れるふりはするが心は売らないという誇り高き生き物だ。訓練ができない日が一週間以上続くと、飛ばしても戻って来なくなったりすることもあるとか。毎日のコミュニケーションで信頼関係を築いていくことが、何よりも大事になってくる。

鷹の本能を尊重しながら、鷹と鷹匠の息が合って行われる狩りと言えるだろう。

鷹狩は権力の象徴

そもそも鷹狩が日本に登場したのは、いつ頃のことだろうか。

鷹狩の起源は中央アジアの遊牧民といわれ、有史以前に遡る。その後、世界の国々に広まっていく。日本へ鷹狩の技術が伝わったのは、仁徳天皇の時代。だが古代日本では誰もが行えるものではなかった。



鷹匠は木になることが必須!?

オオタカなどの鷹は、木に止まって獲物を待ち伏せる。だから鷹匠は、鷹が落ち着いて集中できるように、木にならなければいけない。呼び寄せる時も同様に止まりやすい木になることが求められる。さらに美しく見せるために、腕の角度や伸ばし方など決まった姿形がある。

天皇、皇族、貴族に限られていた。そして、中世では武家が、近世では将軍や大名も武芸の一つとして興じるようになる。

権力者たちにとって、娯楽であるとともに、権力の象徴でもあった鷹狩。天皇や将軍などが主催で行う狩りでは、鷹匠、藪などに潜む獲物を追い出す勢子や馬と騎馬者、家臣などを引き連れ狩場へ向う。大行列になることもあった。狩場に着いたら、天皇や将軍は見晴らしの良い場所に陣取り見物するのだが、自らの支配領域を確認する儀礼的な意味も含んでいた。そして獲った獲物を食べることで、そこに生息する生き物は天皇や将軍のものであることを、臣下に示す目的もあったといわれる。大名時代になると、領内の民の様子を視察したり、敵を探る目的もそこに加えられた。

ツルが最終目標!?

キジやカモなど獲った獲物はその場で料理されたり、上の権力者に献上するために塩漬けにされたりしていた。江戸時代、最も格が高い獲物であったのがツル。縁起物として人気があり、天皇にも献上されていた。基本的に鷹は自分の体より大きな獲物は狙わない。ツルを獲るための特別な訓練があり、ツルが獲れるようになると、鷹自身の価値もワンランク上がった。

また、主従関係を構築する手段の一つとして、戦国時代、諸大名は織田信長や豊臣秀吉に、鷹や鷹狩で捕らえた獲物を献上していた。千回行ったという徳川家康においては、鷹狩を利用して天皇制を上手く組み込み、幕府の統制を図っていったという。

いつの時代においても、鷹狩は権力者とは切っても切れない縁があったようだ。

駿府城公園にある、拳に鷹を据えた徳川家康像。
家康の鷹狩好きを物語っている。

世界一美しい、日本の鷹狩

鷹狩の技術が日本に伝わって一六〇〇年以上の中で、日本独自の技や精神が培われてきた。その代表的な技が、拳から鷹を獲物に向かって送り出す「羽合」という技。鷹と鷹匠の呼吸が合わさって成功した時の境地は「人鷹一体」といわれ、鷹匠がめざす究極の感覚だという。

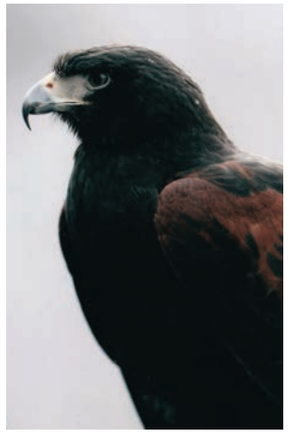
そして理想は、血を一滴も流さず、獲物は無傷で獲ること。ほかにも鷹を架

（止まり木）に止まらせる時の紐の結び方、拳に据えた時の紐の持ち方、天皇や将軍に鷹を受け渡す時の所作など様々な作法がある。

ここでおもしろいのが、鷹の位置づけだ。鷹は天皇や将軍のものであることから、「御鷹」と呼ばれ、鷹匠でさえ素手で触ることは許されていなかった。天皇や将軍に次ぐ高い身分として敬われ、鷹匠は鷹を飼うではなく、鷹を主人と思い仕えていたのだ。仕えることで、自分自身をも磨いていく修行になっていたそうだ。

これら日本人が持つ武士道に通じる精神や美意識が、世界一といわれる技をつくり上げていったのだろう。

途中、禁止となる時代もあったが、鷹狩は天皇や公家、武家によって継承され育まれていく。諏訪流、吉田流をはじめ様々な流派も生まれ、徳川時代、八代将軍吉宗の時に、その技が究められて頂点を迎える。



現代では、ハリスホークも遣われる

美術品でもあった鷹狩道具

鷹狩で使用する道具には、主に大緒、餌合子、口餌籠、丸鳩入れ、策、鞢、と呼ばれるものなどがある。鷹に使われる道具は、随所に最も高貴な色である紫色が使われていた。また、餌合子や丸鳩入れは漆塗りにするなど、道具にまで日本の伝統美が息づいていた。

策　藤の花の蔓で作られた棒。鷹に触れられないため、先を水に濡らして柔らかくし、嘴の汚れを拭いたり、翼や尾羽の乱れを整える時に使う。

大緒　鷹をつないでおく紐。鷹の足に触れる部分は、高貴な色の紫色が使われていた。

ハヤブサ／麻紐

オオタカとハイタカ用／大緒に正絹の組紐

＊江戸時代、格が一番上の鶴を捕らえられるようになると、組紐の色が紫色に格上げされた。

鞢　鷹を拳に据える時につける、革製の手袋。流派により呼び方が異なり、弓掛ともいう。

餌合子　楕円形の木製の器に漆を塗った餌入れ。蓋で器を叩いて鷹を呼び戻す。主にオオタカ用。

口餌籠　藤製の籠に根付を付けた、スズメを入れるための餌入れ。主にハイタカ用。

裏側

丸鳩入れ　貼り重ねた和紙を漆塗りで仕上げた一閑張の器で、丸鳩を入れるための餌入れ。主にハヤブサ用。

ハヤブサ

愛知で生まれた技

時は尾張藩の初代藩主であった徳川義直の頃。新たな鷹狩りの技が、ここ愛知で生まれる。その考案者は、尾張藩士の横井作左衛門だ。

ある時、作左衛門が鷹と川のほとりを歩いていると、長い竹竿の先に反物を縛って洗う音に驚いたカモが一斉に飛び立った。その時、どこからともなくハヤブサが舞い降りてカモを捕まえ、飛び去っていった。その様子を見て「これだ！」とひらめいた作左衛門。まずハヤブサを飼いならし、布を結び付けた竿を追いかけてくるように仕込み始める。それができるようになったら、獲物まで何百メートルも誘導し、獲物を目がけて竿を振り下ろし、上空で待機しているハヤブサを急降下させて仕留められるように訓練。そして、狩りをする姿や勇ましさにも磨きをかけて、技をつくり上げ、作左衛門の「竿鷹」と呼ばれるようになった。やがて竿鷹の技は、竿から麾と呼ばれる和紙を束ねて竹の先に付けたものに進化し、伝えられていく。

作左衛門が考え出した竿鷹は、まさに麾を使った鷹術の基本であり、素晴らしい技といえる。

上げ鷹仕込みで使う麾
ハヤブサを獲物へ誘導する時や、時計と反対まわりに回して呼び寄せたりする時に使う。

鷹の目線から見る世界

「無益な殺生はしない」鷹狩の根本にある精神だ。狩りを行える場所は狩場のみと決められ、捕らえていい獲物の数も決められるなど、厳しいルールがあった。乱獲を防ぎ、自然環境を守るという思いがあったのだろう。

その思いは、現代にも通じる。鷹について正しい知識を得ることをはじめ、人と鷹や、多くの生き物たちとの共生の大切さを学んでいくことは、生物多様性を保全していくことにつながっていく。

今も昔も、様々な生き物が生きる世界を見せてくれる鷹。その美しくも、厳しい世界は、私たちにとってかけがえのないものであることを教えてくれる。

日本最初の鷹匠は女性だった!?

仁徳天皇の時代、日本へ鷹狩の技術を教えたのが百済から渡来していた酒(さけの)君(きみ)。酒君を留まらせるために、美女を集めて妻を選ばせた。その女性が技術を教わり、日本で初めての鷹匠になったという言い伝えがある。

今回お話を聞かせてくれたのは…

吉田流鷹匠（故・丹羽有得氏弟子）の伏屋典昭さん

小学1年生の時に科学雑誌で見た鷹に憧れ、吉田流鷹術の村越家最後の鷹匠村越仙太郎に師事した丹羽有得氏に直接指導を受け、吉田流鷹匠となる。

■取材協力／伏屋典昭さん
■写真提供／藤田一弥写真事務所、蜂須賀義和さん　■浮世絵／東京都立図書館
■参考資料／「鷹狩の日本史」福田千鶴・武井弘一編、「小松菜と江戸のお鷹狩り」亀井千歩子著、「鳥の博物誌」国松俊英著、「鷹と将軍 徳川社会の贈答システム」岡崎寛徳著、「鷹の師匠、狩りのお時間です！」ごまきち著、「稲沢のむかしばなし 祖父江の竿鷹」より

People

「勉強になりました」と言える素直さを持ち続けたいです。

小島浩資（東海テレビ放送株式会社 代表取締役社長 愛銀教育文化財団 理事）

■小島浩資 プロフィール

1958年、東海市生まれ。名古屋工業大学工学部卒。1981年4月、東海テレビ放送株式会社に入社。取締役東京支社長、常務取締役経営企画局長、専務取締役を経て、2019年6月より現職。座右の銘は、「明日死ぬかのように生きよ 永遠に生きるかのように学べ（マハトマ・ガンジー）」。現状に満足しないよう、新しいことを知ったかなど寝る前に1日を振り返るようにしている。

心おきなく話ができ、本当の自分をさらけ出せる友人と出会えた学生時代は、貴重であり楽しかったです。ただ、振り返ってみると、ダメな学生でした（笑）。真面目に勉強をせず、何がしたいのか、将来のことも考えていませんでしたから。だからこそ、人生の先輩として若い人たちには「人生は長いけど短い。時間を大切にし、今を無駄にするなよ」と伝えたいです。

学生時代は誰もが、将来への期待や不安を抱くと思います。同時に、自分が本当にしたいことは何か、どこに向かって生きていこうとしているのかなど、人生について考えるべき時期だと思います。その時期に考えることは、必ず皆さんの糧になるので、少しでも考える時間を持ってほしいです。

人生は自分でつくるドラマであり、主人公は自分。すべての責任は自分にあるので、最後に後悔しないためにも、やりたいことにはどんどんチャレンジしてほしいですね。失敗したら、反省をしてまた進めばいいので。何もせず、他の人の意見で動いて後悔するような人生は、送ってほしくないなと思います。

私は理科系の大学で学んでいましたが、就職先に選んだのは、まったく違う分野のテレビ業界です。私にとってはチャレンジであり、ワクワクすることでもありました。営業に配属されて一、二年くらい経った頃、仕事がおもしろくなってきたことを覚えています。企画を提案して決めてもらえた時の達成感や、話すことで信頼関係が築かれていくことが楽しかったですね。もしかして、人と話すことが好きなのかなと思ったりしてとを得意と思ったことがなかったので、うれしい気づきでした。

二十代後半で東京へ転勤になり、二十年以上東京にいましたが、名古屋を俯瞰して見ることができたのは、良い経験でした。その時感じたのは、名古屋はやはり一地方であるということ。一地方ではあるけれど重要な位置づけにあり、ビジネスや観光などにおけるポテンシャルはとても高いということです。各企業が文化醸成に取り組んで力をつけていけば、もっと魅力的な地域になっていくと思っていました。今でも、その気持ちは強くあります。

東海テレビも、その一翼を担う企業として、時代に媚びることなく、ローカルテレビ局として地元に密着した、地元重視の情報を伝え続けていくことが使命と考えています。

そして、信頼をさらに深めていき、決して裏切らない。仕事はもちろん、人と人がつながっていくうえで信頼は大切であり、話す一言ひと言や行動が積み重なって築かれていくものです。しかし、自分の利になるようなことを優先すれば、一瞬で失われてしまうので、真摯に向き合うことを常に心掛け、その重要性を社員たちにも伝えています。

今、テレビ番組を観る環境も随分と変わりました。インターネットでドラマや映画を観ることが当たり前になってきている中で、我々テレビ業界もテレビ放送だけに固執していては取り残されてしまいます。そこで、インターネットと共存していくために、新たな試みとして取り組んでいるのが、名古屋のテレビ局四局合同の動画・情報配信サービス「Locipo（ロキポ）」です。各局の番組の配信や、地域のグルメ・観光などの情報を得られるサイトですが、多様化する視聴環境に対応しながら、テレビの存在をアピールしていきたいと考えています。

価値観が多様化する中で、社員に伝えていることは「お花畑になろう」ということ。色とりどりの花が咲くお花畑になって、魅力的な集団になろうという意味で、いろいろな考え方の人がいていいんです。それぞれがアンテナを高くして様々な情報をキャッチし、アイデアを出し合うことが大切ですから。

もちろん、方向性を決めて一体となって動くことは必要で、その時に求められるのが、受け入れる力。自分と違う考え方を受け入れることは、なかなか難しい場合もありますが、相手の立場に立って考える力を誰もが身に付け、お互いを尊重し合えば、より素晴らしい番組が作れると思っています。もしダメだと思ったら反省して、次にいけばいい。それを積み重ねることで、誰もが働きやすい環境になり、また新しい景色が見られると信じています。とは言っても、なかなか難しいですけどね。

尊敬する先輩から教わり、ずっと心に留めている言葉が、「いつまでも素直であれ」という言葉。七十歳、八十歳になっても「勉強になりました」と言える素直さを持って、ワクワクしながら成長し続け、悔いのない人生を過ごしたいと思っています。―談―

舞台映像作家である山田晋平さん。演劇やオペラ、ダンスなど舞台の演出で使われる映像制作をはじめ、現代美術作家とのコラボレーションによるインスタレーション映像の制作など、幅広いフィールドで活躍中だ。

「映像は、今でもなければ、ここでもない世界を持ってくることができます。それが過去、または未来になるかもしれない。そういった演出は、映像でなければできないと思っています」

映像でしか表現できないことを常に考え、チャレンジしている山田さんが近年取り組んでいるのが、映像演劇。演劇カンパニー『チェルフィッチュ』主宰の岡田利規さんと創り出した、生身の俳優が登場しない、全く新しいかたちの演劇だ。

最新作は、二〇二二年に韓国でも上演された『ニュー・イリュージョン』。一対の半透明のアクリル板に撮影した作品を投影するのだが、ふとした瞬間、舞台にいないはずの俳優の気配を感じたり、劇場内があたかも作品の世界に入り込んだような感覚が生まれる。

「錯覚が起きるというか。作品の世界の中にいると信じたくなる仕掛けを作り、お客様の想像力を掻き立てられれば、おもしろいなと思っています」

ニュー・イリュージョン

そして今、最も興味を持っているのはスクリーンの素材や形。映す素材や環境によって、全然違う効果が生まれると考えている。これまでにもカーテンや非常口の扉など様々な素材や形への投影にチャレンジしている。半透明の素材は、映像と素材の向こう側に見える世界を同時に見られ、虚構と現実がつながるような感覚が興味深かったそうだ。

「今後は、透明な素材や煙にも映してみたいですね。まだまだ研究中ですが、それらを使って、どうやったらおもしろく見せられるのか考えるのが楽しいです」

記憶にもなり、記録にもなる映像。撮影している時は〝現在〟で、撮影したものを見る時は〝過去〟になっているという。

「常に過去を振り返られるこの技術を使い、自分の身の回りのことや、社会のことを考えるきっかけになるような作品をつくっていきたいですね」

映像の可能性に挑戦し続ける山田さんの今後の活躍が楽しみだ。

渚・瞼・カーテン

カワララブソディ

映像でしか表現できない、新しい可能性を見つけていきたい。

舞台映像作家
山田晋平さん
第30回助成（個人）

愛知県豊橋市を拠点に活動。映像プロジェクト「ベイビーシアター『MARIMO』」映像ディレクション（2020年）、オーベルジュ豊岡1925主催「女工哀歌1925」での映像・監修（2019年・兵庫）など多数の舞台映像や、地域における記録映像作品なども制作。豊橋にあるアトリエでは、地域の皆さんに芸術や文化に触れてもらおうと、様々なテーマで「月イチ水あび」というワークショップを開催している。

「お稽古や、むすめかぶきの写真集を初めて見た時に、女性や男性という概念がなく、すごいものを見たという衝撃を受けました」

というのは、むすめかぶきのメンバーである柴川菜月さん。

むすめかぶきは、十二代目市川團十郎（市川宗家）から姓を許された市川櫻香さんが立ち上げた、女性だけの歌舞伎集団だ。現在はNPO法人として、歌舞伎や伝統芸能の普及啓発を目指し、公演や講座・出版活動などを行っている。

舞台では近年、能や狂言の様式を採り入れるなどの新しい試みにも挑戦。歌舞伎でも、能や狂言でも同じだが、何百年と大切に受け継がれてきた役のかたちは、真似て真似て自分のものにしていく。その中で、その役者の味わいが出てくるという。そして、そこに女性ならではの感性や身体的な違いが加わり、むすめかぶきならではの魅力が生まれる。

伝統芸能の魅力は芸だけではない。柴川さんは、日常の振る舞いも、お稽古を通して学ぶことができて良かったと教えてくれた。その振る舞いは、歴史の中ずっと積み重ねられ形づくられた、一番美しい形であることを実感したという。そういった伝統的な部分で敷居が高いというイメージを持たれがちの伝統芸能の魅力を、若い人をはじめ多くの人たちにどう伝えていくか。柴川さんはタイミングが大事だと考えている。

「SNSなどで発信していくことで、歌舞伎、伝統芸能という言葉を目に触れる機会を増やし、浸透させていく（笑）。そうすることで皆さん、受け入れやすくなるのではないかと思っています」

新たな試みとして、舞台映像の配信を始めた。すり足や顔の表情など細かな部分をアップで撮影するなど、劇場での鑑賞と合わせて楽しんでもらえるよう試行錯誤中だ。

今後は、歌舞伎や伝統芸能に親しめる古典の日（十一月一日）の認知度を高め、多くの人が興味を持って触れられる環境づくりを目指したいと教えてくれた柴川さん。

「伝統芸能の魅力を伝えながら、一緒に楽しみ、学んでいけたらと思っています」

と、最後に目を輝かせながら語ってくれた。

柴川菜月さん

日本の美しい心と技に親しめる環境づくりをしていきたい。

日本伝統芸能文化の普及啓発
NPO 法人 むすめかぶき
第31回助成（団体）

1983年発足。1992年に12代目市川團十郎より市川の姓を許される。12代目市川宗家監修「名古屋女流歌舞伎」、能と歌舞伎による新作「天の探女」（藤田流能楽笛方宗家藤田六郎兵衛監修）など年2回以上の公演を開催。近年はさらに、伝統文化をつなぐ活動を広く開催し、子供たちへの指導も実施。40周年を迎える2023年は、記念公演を予定している。

仲間達の近況メモ

2022年 9月

●**劇団天白月夜**　第31回助成・団体
劇団天白月夜 第4回 本公演　天白文化小劇場会館25周年記念第4弾「ほたる館物語」〔天白文化小劇場（名古屋市天白区）〕

2022年 10月

●**名古屋郷土文化会（郷土史）**　第7回助成・団体
名古屋郷土文化会 見学会「織田信長と小牧山城」
〔小牧山（小牧市歴史館等）（小牧市）〕

●**旭如会（琵琶演奏）**　第22回助成・団体
名古屋発祥 筑前琵琶八洲流創流百年記念「語り継ぐ百年」
〔名古屋能楽堂（名古屋市中区）〕

●**神村泰代さん（アート作品制作）**　第31回助成・個人
「町を紡ぐ 景色を織る 日々を縫う その手を纏う　光を結わう」
〔長者町コットンビルグラウンド（名古屋市中区）〕

●**Office KAN（演劇）**　第28回助成・団体
Office KAN 第8回プロデュース公演「なんとなくリアな」
〔昭和文化小劇場（名古屋市昭和区）〕

●**劇団天白月夜**　第31回助成・団体
第2回 天白月夜祭「秋のひとときをハッピーに彩る自主公演」
〔天白文化小劇場（名古屋市天白区）〕

●**彫刻村 村長 石川裕さん**　第33回助成・個人
フラワーパーク Art プロジェクト展 ーかわのほとりでー（出展）
〔国営木曽三川公園フラワーパーク江南（江南市）〕

2022年 11月

●**劇団名芸**　第30回助成・団体
60周年記念第3弾「ベニスの商人」〔天白文化小劇場（名古屋市天白区）〕

●**木曜座（演劇）**　第18回助成・団体
第36回木曜座演劇公演「明日葉の庭」〔東海市立文化センターホール（東海市）〕

●**はせひろいちさん（劇作・演出）**　第8回助成・個人
劇団ジャブジャブサーキット・番外公演「シヴァ氏の幕間2022」（構成・演出）〔損保ジャパン人形劇場ひまわりホール（名古屋市中区）〕

●**コラボックル（打楽器とピアノアンサンブル）**　第32回助成・団体
ランチタイム名曲コンサート2022「3人とは思えない驚きのサウンド vol.2」〔宗次ホール（名古屋市中区）〕」

●**劇団天白月夜**　第31回助成・団体
第3回 てんぱく文化祭 劇団天白月夜「カラフル!」で出演
〔天白文化小劇場（名古屋市天白区）〕

●**深澤伸友さん（海外演劇の翻訳・演出）**　第32回助成・個人
リーディングシアター らっ・だい・と 名芸大・トライアウト公演「エバ・ペロン、もしくは…エビータのひつぎ」（台本・演出）〔名古屋芸術大学 中アンサンブル室（北名古屋市）〕

●**名古屋ビトクリア合唱団**　第33回助成・団体
第26回定期演奏会〔熱田文化小劇場（名古屋市熱田区）〕

●**田口友里衣さん（ガラスアート）**　第31回助成・個人
ワークショップ開催〔文化フォーラム春日井（春日井市）〕

●**Office KAN（演劇）**　第28回助成・団体
りぶらサポータークラブ15周年記念公演 二人芝居「父と暮せば」〔岡崎市図書館交流プラザりぶらホール（岡崎市）〕

●**劇団名芸**　第30回助成・団体
60周年記念公演　第79回公演「ベニスの商人」
〔天白文化小劇場（名古屋市天白区）〕

●**奥三河音楽連盟**　第8回助成・団体
第47回新城音楽祭〔新城文化会館大ホール（新城市）〕

●**内ヶ島幹子さん（アートと人と交流と）**　第33回助成・個人
第22回日・韓現代 ART 交流展 出展〔市民ギャラリー矢田（名古屋市東区）〕

●**語人 サヤ佳さん（語り活動）**　第26回助成・個人
「テラブレーション in 新美南吉記念館2022」開催〔新美南吉記念館（半田市）〕
保見コンサート 文化で交流「音楽とお話の世界」に語りで出演〔保見交流館（豊田市）〕

●**菅谷瑞恵さん（教育・演劇）**　第33回助成・個人
七ツ寺共同スタジオ50周年記念公演「夢の肉弾三勇士」に出演〔七ツ寺共同スタジオ（名古屋市中区）〕

2022年 12月

●**STRINGS（演劇）**　第32回助成・団体
第8回公演「帰宅」〔昭和文化小劇場（名古屋市昭和区）〕

●**新城吹奏楽団**　第6回助成・団体
第95回定期演奏会〔新城文化会館大ホール（新城市）〕

●**大橋敏彦さん（金工）**　第3回助成・個人
第52回「あかね会工芸展」出展
〔愛知県美術館ギャラリー J1 室（名古屋市東区）〕

●**菅谷瑞恵さん（教育・演劇）**　第33回助成・個人
リーディングシアター 「ひと おもふ とき」に出演
〔劇団 ph-7 地下劇場（名古屋市中区）〕

書籍・会報誌等の発行

●**愛知中世城郭研究会**　第30回助成・団体
8月…「愛城研報告」第25号発刊

●**まつり同好会**　第25回助成・団体
9・11月…「まつり通信」621・622号発行

●**忠震会**　第8回助成・団体
9月…「岩瀬忠震西征日記注解」刊行

●**長久手市郷土史研究会**　第13回助成・団体
9月…「胡牀石」第60号発行

●**野田史料館**　第1回助成・団体
9月…「野田史料館報」第164号発行

●**はんだ郷土史研究会**　第19回助成・団体
9・11月…「はんだ郷土史だより」第104・105号発行

●**美術文化史研究会**　第11回助成・団体
9月…機関誌「びぞん」第100号発行

●**名古屋郷土文化会**　第7回助成・団体
9月…「郷土文化」第77巻第1号発行

●**江南郷土史研究会**　第3回助成・団体
10～12月…「江南郷土史研究会会報」524～526号発行

●**小牧市文芸協会**　第2回助成・団体
10～12月…郷土文芸誌「駒来」第609～611号発行

●**愛知歴史研究会**　第7回助成・団体
10月…「あいち歴研会誌」第177号発行

●**三ツ松悟さん**　第27回助成・個人
11月…れぼーと随想 第十巻「元刈谷村の歌人 豊後守 藤原今樹」を発行

●**ため池の自然研究会**　第26回助成・団体
12月…「ため池の自然」No.63発行

YouTube

●**菅谷瑞恵さん（教育・演劇）**　第33回助成・個人
「満蒙開拓を語り継ぐ」手記朗読プロジェクト
〔毎週月曜日22:00～ 配信〕

※ここには事務局に入った連絡分をまとめて掲載しました。連絡状況によって、掲載のタイミングがずれる場合があります。ご了承ください。今後も皆さんの活動状況をお知らせいただければ幸いです。

誰もが笑顔になれるように。知ることから始まるボランティア。

JRC 部
愛知県立岡崎東高等学校
第32回援助（高校生）

塚本雅則先生の指導の下、現在7名（男子2名、女子5名）が活動中。高校生ボランティア・アワード2020で「平原綾香賞」（2020年）、ボランティア・スピリット・アワードで「コミュニティ賞」（2020）、愛知県高文連ボランティア専門部活動発表県大会で最優秀賞など、様々な大会で賞を受賞。全国高校生手話パフォーマンス甲子園でも、第4回・5回（2017年・2018年）で全国大会への出場を果たしている。

JRC（Junior Red Cross（青少年赤十字））に加盟してから四〇年以上、様々なボランティア活動に取り組む、岡崎東高校のJRC部。その活動内容は、手話の啓発活動、学童保育や放課後デイサービス、独居老人宅への訪問など、地域に根差した活動を行っている。

だが、ここ数年のコロナ過では活動も制限され、生徒たちは高校生である自分たちが取り組めることは何かを模索。シトラスリボンの普及活動や医療従事者への募金活動、コンタクトレンズの空ケースの回収など校内で行える活動に取り組んだ。その中でも力を入れていたのが、盲導犬や聴導犬といった介助犬の啓発活動だ。チラシを制作したり、実際の介助犬とスタッフの方を文化祭に招いて、その役割を紹介した。

「この活動を通じて、知ってもらうことの難しさを知りました」

という部長の黒柳桜介君。同時に、手助けは知ることから始まり、知らないことが障がい者の行動を妨げる要因にもなることに気づかされたという。

ボランティア活動は多様性を学ぶ場にもなっているという校長の大野正樹先生。

「いろいろな人と触れ合うことで、自分自身と向き合い、どう社会において役立っていけるようになるのか。考え求めることで、視野を広げていってほしいです」

まさに、教育方針である「探求は希望の扉を開く」という言葉にふさわしい部活であると話してくれた。

「初めはどうしても独りよがりになりがちですが、活動を重ねていく中で、自分に求められている役割は何かを考えて取り組めるようになっていきます」

ニーズに基づく活動という本来の意味を、実践をもって理解していくことに努めている顧問の塚本雅則先生。ニュースや他校の活動をヒントに、「あれをやりたい！これをやりたい！」という生徒たちには、ニーズがわかったら、どう取り組んでいくかが重要であることを伝えている。

今後はコロナ過でできなかった、施設などへの訪問にも行ってみたいという黒柳君。

「出会えた皆さんが笑顔になれる、そんな活動をしていきたいです」

楽しみながら奉仕の心を養っていく生徒たちの今後の活躍に期待がふくらむ。

校長の
大野正樹先生

顧問の
塚本雅則先生

部長の
黒柳桜介君

編・集・後・記

今回ご紹介したむすめかぶきや鷹狩を通して、日本の伝統文化や風習には、美意識や知恵など様々な日本の“心”が息づいていると感じました。また、時代を反映した新しい文化がいろいろ生まれる中で、変わらぬものを受け継ぎ伝えていくことの大切さと難しさを感じました。
今年は、日本の心に触れられる伝統に少しでも目を向け、新たな気づきを得られるといいな、と思っています。

表・紙・作・品

「モカケーキ」300×230 mm
紙、鉛筆、色鉛筆、水彩
イミック新子さん作（第32回助成）

●作者の言葉
ハレの日を思わせるケーキと、幼い子どもの美しい瞳・表情は、いつも私の憧れのモチーフです。大切にしていたい心象風景です。

Ayuchi

あゆち第94号●2023年1月
発行：公益財団法人　愛銀教育文化財団
〒460-8678　名古屋市中区栄三丁目14番12号
愛知銀行本店内 ☎(052) 251-3211（代）
https://www.aichibank.co.jp/company/csr/foundation/